

# 幼児の創造性を伸ばすための音楽リズムの指導



田代廣子

幼児期は環境に左右されることが大きく、何でも模倣をし、また興味のあるものには非常に関心を強く示すが、こうした時期に創造性を（特に音楽リズム指導について）どのようにして育てていくかは、この時期の発達に合わせていくことによりごく自然に育てていけるものである。

廊下にある大鏡の前で自分の姿をうつして手をあげてみたり、飛んだりしているが、そのうちに園内に流れてくる音楽に合わせて一人で手を振ったり、足をあげたりしているところを時々見受けられることがある。

また空を流れる雲をみてひとりごとのように「雲さん、雲さん、どこへいく」と、わらべ歌の一節の旋律をつけて口ずさんだり、このように幼児の生活の中でふとした機会に音楽的な面から

独創しているひとこまをみることがある。こうした場面から見ても、幼児の創造性の芽が出かけているわけである。

また教育要領にも大きく個の項目の中で示されている。

教育内容として、

- (1) 短い旋律を即興的に歌う。
- (2) 知っている旋律に自由にことばをつけて歌う。
- (3) 楽器を感じたままにひく。
- (4) 感じたこと、考えたことを自由からだで表現する。
- (5) 友だちといっしょに感じたこと、考えたことをくふうして

歌や楽器やからだで表現する。

があげられており、この指導にあたっては幼児の気持ちや考えを自由に表現させ、創造的な活動を楽しませて、意欲を高めるよう

にすることとなっているが、その指導にあたり横の糸として考えられる点は、

### 1 自然的にあらわれる機会をつかまえる。

自然的にあらわれる機会を、のがさずに指導していくことが最も大切である。幼児一人一人それぞれに個性をもっている。創造的なものを育てるには一様に取り扱わないで、あらゆる個々の場合を利用することである。であるから教師は、常に細心の注意をはらって幼児の行動とかつぶやきに注意をむけていなければならぬ。

### 2 興味や関心をもたせる。

自然や事物に対して幼児の興味や関心をもたせることは創造の第一歩であるが、これは教師自身のおどろきの態度や言葉により幼児自身が「オヤ、何であろう」「おもしろいぞ」と関心と興味を引き起こすものである。興味の対象となる情景の設定のくふうが大切なことである。そのとりまく環境が大切であるのもこうしたことからであるし、これが指導の中での導入の大きな役割となるわけである。

### 3 自信をもたせる。

小さなことでも幼児自身の考えたものをほめてやり、自信をもたせるようにし、また友だち同士で、例えば動きをみせあったり即興的に歌ったことをもう一度教師と共に歌ったり、また人の前で発表したりさせて自信をもたせることが非常に大切である。

### 4 教師の助言を適切にする。

教師の助言のしかたにより幼児の創造性が育っていくか、あるいは画一的になってしまいか、あるいはそのまま芽が枯れてしまいか、わかれる。以上が横糸であり、縦糸として考えられるのは次のことである。

#### A 題材の選択の必要性

幼児に対してどの題材からどのような経験をもたせるか、反対に経験をさせるためにどのような題材をもってくるかの両面から、題材展開が望ましい方向にいくことをみとおしてよりよい題材を選択する必要がある。また年間計画をたてる場合に、経験させておかなければならないことをうまく織りなすのに、幼児の生活を考えて選択をうまくしないとむだになる場合がある。題材は

それが望ましい方向に向かうためには幼児の学習意欲とレディネスが考慮されたものである。

ここでまず音楽リズムの領域で創造性を育てることにしほって論を進めるが、音楽リズムとして創造性を伸ばすために、内容としては要領の中でも五つ示されているが、主としてここではからで表現することに重点をおいてあげていくことにする。何故ならば、私としては松江市音楽リズム研究部として共同で研究したことをもとにしたからであり、他の面はまたの機会にゆずることになりたい。題材選択の必要は一方創造性を育てるための段階的な指導をする上からもうかび出てくる。創造性を育てるにはそのもとなるものがなければならぬ。そのためには

○わらべ歌

○リズムカルな集団あそび

○基礎リズム訓練

○フォークダンス

○歌を伴うあそび

などをおりませて指導することにより、模倣から創造へと教師の助言によって移行させていく必要がある。こうした経験はかたよらないように指導されなくてはならない。

## B 展開について

### ④ 導入の興味づけ

興味のあるものに対しては予想以上に活動量、表現力を示すものである。そのためにはいろいろの方法がある。まず多いのが、話し合いであるが、題材に関して教師の話からはいったり、また空想的物語からはいれる。四歳においては簡単な情景を示して、これに対して知っている事柄について話し合ってから、そのものになりきって動く。動きをしながら情景を思い出させたり、観察したりして更に話し合って認識を深めて動く。

年長組は経験内容に応じて二、三の情景設定をまとめ、短い一つの物語として話し合いが十分に行なわれるように進めるが、その間幼児の模倣に対する良いくふうもでてきて、更に話し合いが活発となるよう模倣を劇的に運んで、内容を豊かにすることが、表現の興味づけになってくる。

年長、年少を問わず幼児の発言は特定の者に限られないよう、また幼児の発言は非常に断片的であることが多いので、教師の適切な指導助言によって要点外にそれる話の誘導と消極的な幼児への激励が必要である。

また一方リズム感覚を養う歩と歩の応用と、そしてその展開で、二人、四人組のあそびに移行し、楽しいグループあそびに発

展させることができることもある。

個性豊かに表現させる場合、題材によっては導入に話し合いをせずただちに模倣をさせて誘導をしながら導入するのがよい。この場合には表現させようとする情景などを、何らかの方法でみたり、あそんだりの経験の前に予備にさせておかねばならない。知っていることが一つの興味づけになるわけである。

⑧ 模倣内容のとらえ方

幼児の興味のある動物を例にとると、動きのもとになる歩の変化範囲を考えて情景設定をする。この場合には、速度とリズムの変化が伴う情景とする。昇る降りる速度の変化とか、小川をとびこえたり、方向をかえたりが模倣の内容となる。こうしたことにより積極的に興味を示して活動的に動く。そして動物の生活動態から情景設定することが、模倣あそびの学習となる。あそびの場の構成をくふうして与えることにより模倣活動は容易となり、まただんだん幼児なりに創造的に自分たちで場を設定したりして、ますます創造的な表現へと意欲をたかめることができる。模倣経験の少ない幼児には準備する材料の種類、量の増減が興味を持続に影響する。

例後記(27頁)のようにまた男女差のみられる対象に対しては、このような配慮により抵抗感が減少できる。象の小舎、友人の家、

一本橋、材木置場、ビニールテープで池を造ったり、また白墨で場を簡単に設定するなど情景設定を豊富にできるし、また幼児の表現活動をより豊かにしてよい変化をみることとなる。またあしかに教師が餌を与える役をすると、その後から幼児は匍匐態勢の活動がリズムカルに反復されて、興味は最高潮に達して、いろいろと表現が幼児自身でくふうされ創造されてきた。また場の設定のくふうは施設、遊具の使用から、友だち同士が交代しあって遊具の役をする。更にまた実際上の設定を省略してあそびの中であるものと仮定し定められた場所の活用によって充実を計ることもできるようになってくる。幼児の題材に対しての特徴のとらえ方は幼児のものの観方、とらえ方の特質がよくみられる。

蛙の表現の場合は直感的に観察をし、すぐに活動的な運動にうつるが、メダカなどはむずかしい。メダカは幼児として模倣する場合、活動的な運動がしにくく、模倣は一時停滞するが、助言により幼児のくふうの範囲は広がる。ただ題材としては、表現しやすいものとしにくいものがあることを考えなくてはならない。

◎ 模倣について

表現活動は幼児の模倣本能に基づいて、模倣的表現活動が多い。模倣は表現活動からしだいに創造的要素の多い活動へと発達してくる。他の行動を観察し、幼児が興味をもった行動を模倣

し、自分の想像を加えて他人の前に表現しようとする。模倣活動は次の段階がある。

・既得の経験をそのまま表現する模倣活動  
・あそんだ形をとりながら、過去に自分が経験したことを既存の形態で表現する。

・創造に近い模倣で模倣した形が学習した経験の中にない。  
・自主的な創造

こうした段階があるが、幼児の模倣性は非常に強いので一人の幼児が小鳥の型を表現するとすぐに他の幼児がまねたり、またリーダー的幼児の模倣により単一リズムとして一般化されて概念的な動き方になりやすいので、題材のつかまえ方や情景描写を豊かに与えるよう助言が必要になってくる。事実と想像をおりませて内容設定を豊富に与えるわけで、各個人に適當する受けとり方が可能になり個性的な動きの模倣ができるようになる。そしてやがて自分で発見して模倣できるようになる。

また助言のしかたで「○○さんは上手ですね」「○○にはほんとうによくてますよ」と漫然としたいい方をするが、「○○さんの手のあげ方は○○によくてますね」というように何をみるか目のつけどころに注意させて、更に対象の特徴に結びつくよう指導助言をする。そして幼児との問答によって何をどのようにする

かを気付かせ、さらに各自の動きへ還元して模倣を豊かにしていく。題材の観察によって自主的模倣経験を積み重ねていくことが重要であり、教師の思いつきによる幼児の模倣であってはいけない。更にその対象のものになりきるからだの動き方と、心の状態が望ましい。

鳥などの題材で伝統的とみられる特有のパターンがあり、概念的なとらえ方をする幼児があるが、模倣の容易な単一リズムの反復は幼児が動く場合、自分で発見する機会が見出しにくく学習効果が少ないので、なるべく自然的な活動としての模倣遊びを充実させなくてはならない。

以上からだてて表現することについての指導の方法の要点について述べてみたが、要は幼児の発達に合わせて、幼児と環境の関係作用により、よい題材を選択し、計画は密にして劇的に題材内容をはこんでいくことが必要であり、模倣遊びは幼児の要求に応じて自発的に活動させ、画一にならないように注意していかねばならない。個性に応じて、各自の経験に即した模倣表現にとりくんでいく学習形態で進めることが望ましい。

次に幼児の活動と教師の指導事例を参考までにあげる。(パークの動物という題材)

幼児の活動状況

指導状況記録

イ、パークへ遠足にでかけ、見た動物の名前をあげ、興味のあつたできごとを自由に話し合う。  
 ロ、幼児の発言内容を深め、もつとも興味の持たれた動物である「猿」「あしか」「熊」を題材とする。  
 ハ、好きな動物になり、組み分けをする。  
 ニ、竹の棒の先に白墨をくくりつけ棒を大きく動かして、あしかの池、猿の檻、熊の檻をつくる。

イ、象、熊、兎、猿、あしかなどの動物の生活、動態がよく発言される。教師は発言の少ない幼児におもしろいようす、できごとを想起させるように助言する。動物たちの活動と共に乗り物の楽しさ、お弁当のおいしさなども話題となり楽しさが倍加され、ますます発言活発となる。  
 ロ、動物に対する興味、愛情を、彼らに餌を与える状態で表現する幼児たちの傾向をとらえ、動物ごっこが始められる。  
 ハ、教師の助言で大体三等分され、好きな動物の組ができる。  
 ニ、幼児は竹の棒で描かれる様子をよく注目し、いち早くその中にはいり、棒の先を見送る。さらに教師は椅子の脊に動物の絵を貼り、定められた場所にそれぞれ全員で繰り返しを言い合う。  
 ヘ、匍匐前進を緩徐に行ない後足が十分引きつけられては伸ばす前進となり力強く機敏に動く。

る歩き方をする。  
 ヘ、「あしかのまねのできる人」の発問で一男児が挙手し、指名され元気に歩く。  
 ト、「お猿のまねのできる人」の発問では挙手がなく、教師が模倣を始めると、幼児が喜ぶ。  
 チ、それぞれの場所につき、その動物になつてのそのそ、またはちょこちょこ歩く。  
 リ、教師は、それぞれの檻に近づいては餌を投げてやる。あしかたちは教師の投げる餌の動きに合わせて匍匐態勢より、膝を曲げてしゃがみ、立ちあがりながら跳躍する動きを素早く行なうのでよい模倣となる。  
 ヌ、檻を交代し、動物の模倣を交代して遊ぶ。

ト、教師の模倣は、両腕をよく伸ばし四つん這いとなり指先をまるめて、猿の感じをだす。  
 チ、同一のタクトを与えても適当にリズムをとって歩く、走る、小走りなどするので動物の感じは一応出る。  
 リ、檻毎の動物にそれぞれ特徴を与えてリズム言葉の助言をし、幼児はよい模倣をする。あしかの表現が良好だったので今一度示範させ、足の運び方のどこがよいかゆつくり説明して観察させ、各自の足を運ぶ要領を理解さす目的のためには、運動の要領を説明するためのポイントの把握、説明の順序、何をよく見るかなどが必要である。教師は素早く動いて餌を投げるので、早く移動してはジャンプを競う直観な模倣となる。  
 ヌ、教室の広さに比較して、狭い場所の檻なので動物の種類によっては、模倣の行動範囲が小さいのが惜しまれる。場所には常に最良の条件を与えたい。

(松江市立白波幼稚園)